放眼日中

北京の青空

8月下旬、北京では陸上競技の世界選手権、世界陸上が開かれた。男子100㍍では中国の蘇選手が決勝に残り、ジャマイカのボルト選手等と争う姿に中国中が盛り上がった。中国人選手は女子20㌔競歩で1、2位を占め、最終日には男子走り高跳び、女子やり投げなどで最後まで優勝を争った。ついには、日本が北京オリンピックでメダルを獲得した4×100㍍リレーでも2位に入ってしまった。地元中国の大躍進！暑い中、大勢の観客が連日詰めかけ、熱狂していた。

大会期間中、マラソンなどの競技をテレビで見ていると、北京の空は何とも青かった。この空を見ると、必然的に7年前の北京オリンピックを思い出す。当時北京に住んでいた筆者は、かなり深刻化していた大気汚染が、あっという間に青空に変わったことを鮮明に覚えている。北京の西側にあった大工場を他の都市に移転し、残った工場も1週間前から操業を停止した。車の通行規制も厳しく、2日に1度しか、車が使えない事態になっていた。

あの時も厳しい規制に不満が多く出たが、オリンピックで中国選手が活躍するとムードは一変、当時は「アメとムチ」だといわれていた。それでも北京オリンピックは、「北京のお祭り」にすぎなかったことも併せて思い出す。オリンピックの翌年に、やはり北京で開催された建国60周年の大イベントこそが、「国を挙げたお祭り」であり、オリンピックはその準備だったと言う人までいた。

予行演習では、筆者の住んでいた建国門界隈を夜中に戦車が数十台通り過ぎ、あまりの地響きに、地震かと飛び起きた。イベント直前には自宅に帰るのに何回も検問をくぐり、当日は自宅の窓はもちろん、カーテンすら開けてはならないとの通達に、本当に驚いた。この時も当然、空は真っ青で、雨など降らないのだ。

今回の青空も、もちろん世界陸上のために用意されたものではなく、9月3日の抗日戦争勝利70周年の記念式典を、盛大に飾る演出の準備であった。オリンピックや建国60周年に比べれば、それほど重要にも思われないこのイベントのために、北京の一般市民生活はまた大混乱し、様々な取り締まりが強化されていたと聞く。

日本では「抗日」という名称を見て、また、平和を訴えながら軍事パレードを行うことに嫌悪感を示す報道も多く見られたが、今回の式典および軍事パレードは、現在の中国政府にとっては、特に国内向けに、それほどに大切な国家行事だった、ということではなかろうか。腐敗汚職撲滅運動で、政敵を倒してきた習近平政権が、歴代国家主席を参列させ、主要軍幹部にパレードさせることにより、国内を完全に掌握していることを、強くアピールしているように見えた。だが、それは果たして民衆の方を向いていただろうか。

ある中国人が呟いていた言葉が忘れられない。「夏の日の北京の青空は澄み切っていて、とても気持ちが良いが、しかし、どこか物悲しい」。式典翌日から、また、空はどんよりと曇り始めた、と北京在住者は伝えている。

秋風が吹き始めた北京。政治問題だけでなく、経済・外交など、依然として問題は山積している。昔「北京秋天」といわれた、高く青く澄んだ空は、いつ見られるのだろうか。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。